

## 「他者との関わりと幸福感」

鹿屋市立串良中学校 校長 霜田 さおり

前任校は、離島の小さな小学校でした。歴史と最新の科学が同居する町は、私にとって毎日が非日常でした。防災無線一つとっても、ロケットの輸送で夜中に道路の通行制限がある知らせや、長期休みになると、八つの小学校の代表生徒の夕方の帰宅を促す放送などで、心を躍らせたり、懐かしかったりしました。

その町には、27年目の歴史をもつ山村留学制度があります。小中学校合わせて100名程度の応募があります。住居や学校のキャパシティもありますので、選考があります。子供によっては、2回目、3回目のチャレンジでようやく願いが叶ってやってきた子もいました。

小学生ですから初めは意気揚々と過ごしても、そのうち里心もつくこともあります。子供によっては、仲間の輪に入ろうともしないこともあります。しかし、伝統がほっとかない。出会ったばかりの年下の児童から「○○兄ちゃん」「○○姉ちゃん」と呼ばれ、遊ぼう、遊んでとせがまれたり、目の前で泣いたり、けんかしたりするのを自ずとなだめたり、止めたりとしているうちに、自己有用感、自己存在感が高まり、かたくなだった心もほぐれていくのです。地域も保護者も我が子のように声をかけ、見捨てず見守る。私が子供の頃、学校の行き帰りや地域行事のときに地域の方々から褒められたり、叱られたりしたのを思い出しました。

留学生のエピソードの中でも強く心に残っているものが、かつて里親さんだったTさんからお聞きした話です。

Tさんは過去数年に渡って里親を引き受けてくださっていました。ある日、かつての留学生が電話をしてきました。それは、お父さんが亡くなったという知らせでした。まだ大学1年生。大きな悲しみに沈み、数日経ってからようやく電話を手にしたそうです。電話の最後に、彼は、「自分には種子島にもう一つの家族があると思えることが、自分を支えている」と言ったそうです。見知らぬ土地で家族と離れて過ごした一年間。奮闘しながらも人とつながり、見守ってくれる人々の温かさを実感しながら、強い絆を築いた証の一つを見た気がします。

そして、現在勤務する中学校がある串良町には、「旅立ち式」という行事があります。18歳になった卒業生を新たな生活、新たな土地に向かう3月に送り出す式で、串良がんばる会の方々が主催されています。当時の小・中学校の学年団や管理職もお声かけくださり、地域・保護者・学校でエールを送ります。昨年度、初めて参加させていただきましたが、とても温かな会に感動しました。また、参加した卒業生のほとんどがアンケートで「串良大好き」「串良最高」と答えていることに、これまで地域にどれだけ大切に育まれてきたのかを目の当たりにし胸が熱くなりました。子供時代の他者との豊かな関わりは、生きる上で糧となり、安心感と幸福感に繋がります。今後、子供たちが地域の大きな懐でのびのびと育ち、やがて、地域を盛り立てていく存在になることを願っています。